

越後志料

沼垂湊一件舊記

一

特別
ル4
936
1



冊 1124  
號 986  
卷 1



沼垂溪一件舊記

- 一 御朱印
- 一 溪之書
- 一 小川弘之書

十一  
廿七

定

一 獵後之儀小居下之內四時共可為半役事  
一 所屋職割之儀兩人可執斗但我終之義  
於有之者可為也子細事

附小居下以後地子可為三年休事

一 當津自前之居任之者向後如河折之以題  
目未理者共不可改改引事  
一 自代回着岸之船非分檢令不可有之事  
一 當津公事沙汰之儀者勿論於何事也  
代友人不可及合訴訟但代官表非分之義



聊をく方下是處に遂に穿ぬ之處畢竟新就之儀  
道無可之者非也也此言今之石橋は新の流無之  
者如元可埋之但位在於流無一飲之内者一力勝手  
次身仍為石鏝修固加重也双方に被下無之條  
守れ方不可遺失也

延寶九酉年六月四日

奉行人加加能以下十二人連署

(十川五兵衛日記)

溪之事

一 新の石を河原に流す所を川の石を流す  
之を新の石と云ふ也此の石は古の石に成  
りて元來年中に事お少く延寶年中に  
川別口の沢にお見え申は石は流す所を  
水勢強くと見え申は石は流す所を  
新の石と云ふ也此の石は古の石に成  
りて元來年中に事お少く延寶年中に  
川別口の沢にお見え申は石は流す所を  
水勢強くと見え申は石は流す所を

成ノ先沼毛ニ俄大同元年ハ成化二年ハ八万三千七  
年玉瀬トシル処ニ位存仕在在ニ水道吐埋ガ自代  
港川江面海ニ船道古之橋ニ往來改メテ  
ニ船道ニ川敷ノ欠込往來オキ其ノ新築ニ三  
午年大嶋トシルハ編七午年位存仕在在ニ  
道川欠廣ナリ安文ニ亥年ハ船道向工引地仕度  
宝九年ハ廿二年位存仕在在

一新沼ニ俄成應ニ位存仕在在ニ島トシルハ只  
今ノ寺河浦ニ由ルハ所ニ有方ニ新築田  
欲トシ地境法没リト申ル川有之其ノ道ニ志付ル  
ノ地ニ借ル古ニ橋分ハ献上ニ鮭往を引ト打

陳泰京

又其ノ後ニ浦役領トシテ有方ノ人ノ以テ申年  
應得ノ志付ル納ル先在在島嶋先と古河  
トシテ九十年ハ前トシテ有方ノ人ノ以テ申年  
ニ家數五中申年ハ有方ノ人ノ以テ申年  
一元何カ所ノ人ノ有方ノ人ノ以テ申年  
有方ノ人ノ有方ノ人ノ以テ申年  
来ニ通船通用ノ船道橋先有方ノ人ノ以テ申年  
ハ有方ノ人ノ有方ノ人ノ以テ申年  
知ル一五ノ船道橋先有方ノ人ノ以テ申年  
船道有方ノ人ノ有方ノ人ノ以テ申年  
ハ有方ノ人ノ有方ノ人ノ以テ申年









--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

興泰原製

以下  
7丁  
白紙

紫雲寺湯淵及件舊記

紫雲寺鴻池發一件日記

越後國紫雲寺鴻池之儀分泉川系御料私領教於箇村馬水落  
上至上加治川より枝川有之右何れも紫雲寺鴻池内へ落上  
瀧池にて此瀧水は胎内川へ落堀七座毛得共水落不足仕  
廻村々年々水落致難儀十二三箇年以前右隅廻鏡木小  
右衛門様御代官所三節溝に去雲守領分藤塚遺之申所之  
海口へ鴻縁々水板之新堀を堀堀馬水落更御普請目論具  
有之其節右衛門様より御相談之上去雲守領分在之之  
水損故にも成美之付領分中々御普請加勢人足可仕詰に  
乙度々人足差出申矣

紫雲寺鴻池切之會繪圖裏書

表書之立會繪圖仕立<sup>美</sup>旨趣者先加治川水空雲寺瀉、縣  
敷込入右瀉週四拾五箇村打徒帯田也及水磨御物取も  
上初不仕且而百姓も難儀仕立、仕在村々、鈴本小右  
衛門様巾代官所楠村巾役所、中頼中上瀉以吐堀切之  
儀巾科所巾役人様新發田溝口信濃守様御役人様巾相  
談之上築地村真野村境目之處巾普請新發田も以加  
勢出来仕美事

境之儀者草荷村與道賀新田村境者加治川方紫雲寺瀉  
之川筋先引之通川中<sup>美</sup>之境夫方七度堀切所迄瀉端通リ  
境塚辻土三境塚方東者御料所西北者新發田巾領方に  
御座更築地村與真野村境者堀切之所瀉口方七百九拾

間ハ堀中<sup>美</sup>之境夫方海迄境塚十四北東者築地村村松道  
分西南者真野村藤塚溝分にて朱引之通ニハ  
後身川浚砂置場のたの築地村真野村境塚左右藤塚溝  
地内新堀左右土堀堀程雙方田畑仕附間敷ハ藤塚溝後  
馬見山々西三方有未田方ハ格別之事  
御料所村方ハ紫雲寺瀉にて獵仕至常御場端之儀十三  
箇所毎々之通に江境塚方内ハ八ハ間御場端者田畑に  
いたし中間敷美(中略)

享保六年辛丑年五月廿八日

鈴本小右衛門様御代官所 古川村庄屋三浦平兵衛  
押廻村曰本間三郎兵衛 上野京村曰渡部右左衛門







〔真野原林場一件〕

正徳以迄舊中野訖奉中上小所事

備以迄濃守領内越後國蒲原郡

新築田領之内三於式村五十公野領之内三於村

川北領之内三於村邊通領之内六箇村蒲原領

内是箇村 八百五箇村

匠者人 在惣代 大在屋嘉兵衛外 十一人

銘亦少在衛門様中代官所同回同印

草前村川尻村古川村二本木新村高小寺新村

至抗新村押廻村向中条村住吉新村高田新村

下小松上上松村三日市村早通場所同田村

敦賀新村築地村 八拾七箇村

相手 在惣代 早通場所庄屋門右衛門外三人

在相手の中野中上主者新發田領真野原を草前京築地系

と名附入會之由中上先年村上領松平大和守様御京

式部大輔様御鷹野場にして所産を由中上小儀大成爲に

所産を在場所の儀者新築田領真野原濱山蓮鴻裏石内

八万刈の中野右内道賀村道賀新田村真野村蓮沼新田

村佐々木村地方海之方ハ藤塚濱次早演佃代演蓮塚濱

太良代演此村々にして古田初新開之田畑共に所産中上

在野右内城下三但濱道但蒲原但まじ百五箇村にして地

頭ハ段方や下川銀上佃仕家かやすけまこと結肥草新

川干等迄川申場所に中座主河者御地領之名入河申様  
無中座主其上下東方地頭代々鷹野場に主處箇様之儀  
不存儀相成儀申上至境之儀者加流川方崇雲寺河へ蒸  
川先規今川申之境崇雲寺河者水際を境に之河者御  
科所分真野原者新築田領夫方築地村真野村境者塘半  
にて申者村柄濱藤塚境田畑老境夫方海陸之境迄相違  
無中座主據所持仕事

右相子方申上至者境塚之儀双方庄屋共之會隠密に之  
於七箇所築之是を證據に仕草刈場新に差番川由  
申上り儀大成儀に中座主去丑年中料所に於五箇本方  
崇雲寺河海へ堀割申普請願築地村真野村境塚方藤塚

東林原製

濱地内堀ぬき申に付新發田領方も人足申加勢仕主依  
之御科所加流所にて双方出會御普請一卷致相談川平  
夫より申上り者堀割成就には浮水川蒸干上り地多く  
出来仕後年論し申儀可有御座と申上り先規上りの境  
の邊證文取かはせ御普請中に境塚築之繪面相調申普  
請成就以後藤塚濱に之出會裏の儀に双方印形仕更此  
儀者重十月駒木根肥後守様へ證文繪面共に奉入御披  
見

右相子方境川をき北所川と紛敷申上り信共先規方境  
川紛無御座其證據は川方東は草荷村田畑有之川方  
西北は道賀新田村地方井戸端と申水帳に載り田畑御

歴々其上去年而普清梅村即今代衆新築田役人之會  
歙初任主之境城邊に中登矣

今度直野京之會備面仕立に在り双方備面師同直端所  
見分仕更節相争ふ諱所と申掛に野方何方迄と相尋に  
得者新築田領真野村直野新田打邊鴻新田村佐々木村  
古田畑其外村々新開并藤塚濱次并濱側代濱邊塚濱太  
良代濱之田畑不残論所と申掛刺真野村渡守之衆并蓮  
鴻新田打邊代濱邊塚濱辰村其上地頭之松林教園所山  
守を以附置に處を御料所御林と申且又別行やち杉や  
ちと申作事入用之野方迄護引之田へかこい入層端  
所と申理不盡之仕方迷惑至極奉存又御料所内に於

乙草新築無而歴々と申上は儀も爲に申座は草前村近  
所并紫雲寺鴻小東南濱端通之やち築地原に小野敷野  
方而登矣

去上月廿九日新築田領藤塚濱次并濱之者共獵に罷出  
小跡へ御料於七村三者共人馬大勢相催し而濱に仕  
附置に差取不残刈取申に在り相争之者共新開諱所と  
申掛曾而懸状文言に無之我儘仕矣

在り山野谷内之儀者新築田城下京申衆町在り迄五年  
軒余之衆かや新築田於今六百町余之田畑に五草科此  
所に乙刈申に仕御他領へかち申下儀曾而無申  
歴々申科他領占入込申に共信濃守所御物成まじ

相障在百五箇村いしと之行不申新發田家中迄悉及難  
儀迷惑至極奉存し

享保八癸卯年七月

越後國蒲原郡北七箇村共同新發田領直賀新田  
村真野村移場論裁許之事

所科所北七箇村片許趣染地草葺草と申移場染地村  
草葺村地元に古来入會無分小處新發田領去夏新  
規に差置し由訴之通賀新田真野村言し右左之場所者  
真野常と申新發田領直賀真野其外村々地元に新左  
田畑等右之役並下川銀地頭、納米録等川干場小他

領上一切入會不申由卷之趣吟味處旅七箇村人所申之  
可取用無證據殊右之草若新發田領村々許多之田畑致  
開發置小處而科片新田之由雖申指負享年中之水帳に  
記有之其外右草之内以心得違而科之林有之段申之小  
處等以非分也且正徳年中染地村之者境を踏越於新發  
田領真野草葺に草刈小時鎌等被押置双方之寺境取扱  
小證據有之不入會儀歷然也去夏年此草葺寺邊以吐振割  
之亦双方之庄屋以由該處に新境取染立小由雖申之御  
代官へ相染小處其草葺代官へ双方境取申合之儀必相  
違儀之御代官も逐見合其上右之會繪圖之入用濃縁之  
村々差出殊此度訴出十七箇村之由五箇村裏書印形

有之上者内禮にて承之れと申儀聊以不及沙比(中略)

享保八癸卯年十月廿一日

久	大和	寛	播磨	駒肥後	大	下野
諏	美濃	大	越前	土	江孫	松
相	相模	相模	相模	相模	相模	相模

古學堂孝鴻申書請出未鴻水少、減し申、此處右階縁松  
 平孫之進様内禮所之平儀高井即未子屋小八郎と申し  
 の享保十二年未三月在加治川よりの枝川、切藤塚而海  
 への産堀をも堀後自分物入にて普請仕立、左美者鴻縁干場  
 積に付高五ヶ石程之新田、紅度占預、由にて見分吟味

神保町

三衛源之進様役人、被仰付吟味相済、同年十二月預之通  
 枝川、切藤塚、後等自普請仕立、癸卯に取掛、小八郎儀、面  
 三月病死、兄権兵衛右之通請負申す

(境川、切、付申、四年、寛書)

境川、古紫雲寺、鴻へ入に、切三儀、十月十二日、未子屋小  
 八郎普請取掛、趣直質新田、名主古大庄屋所へ、注進有  
 之十三日、城下三組、大庄屋方、小八郎方、此度、切、宝右  
 使者を以、向古、小八郎、返事、楯村、申、彼所、海老江、申  
 役所、被仰付、吟味、にも、無之、拙者、一分、之、向、にて、相叶  
 吟味、にも、無之、江戸表、申、申、上加治川、切、不、任、にて、は  
 即新田成就、仕向、敷申、申、上、被仰出、申、普請、小八郎、は、鴻、此

加治川へ川原に殿唯今賜へて入臨廻四十五箇打吊本田  
水廣仕其上新田も成就難仕へ付堀切後加治川ノ切告  
に江戸表而頼申上則而禮文禮戴仕り由新申り十四日大  
庄屋右左切相成来ては新築田領達成之趣使者以申  
入り本子屋右八郎手代新右衛門宮川四郎兵衛手代儀  
共取右ノ切場に罷在り八郎父會津佐左衛門ノ申者藤  
塚漢不節段に罷在り十八郎申りは近年境川ノ濁へ水  
際深く濁廻打々迷惑仕其旨趣は新築田様にて加治川  
瀬替被成二ツ山と申所へ所堀落に付右場所にて水表  
文中故に御座、使者通賀新田表主大兵衛申りは加  
治川瀬替三儀者新川は地窪にて古川ノ水行能至故濁

東條百景  
景

への水底以前方控列弱可申り  
ノ切一件に付大庄屋兵衛外二人江戸表へ登り申頼  
新築田中屋敷番堀忠右衛門高孫半左衛門様ノ公義申  
孝河所八木清五郎様一被仰上貫書  
紫雲寺鴻御新田被仰付り二付右濁へ落に松平澤正  
弼様備に信濃守領分境川末古屋右八郎と申新田頼  
人ノ切可申由申り右境川方上土手通危く自然堤切  
り時ハ信濃守御領地於五箇村并領分五於五箇村共  
に過分水廣仕城也迄も水損仕其旨付右ノ切相止り  
様仕度奉存り右紫雲寺鴻へ水吐有之り而も四於同  
年已前洪水三尺土手崩切城也迄水押込申り故此度

境川ノ切ハ而若水吐一節に罷成故に土手即危く奉  
存ハ然共是非ノ切被仰付更得希元ハ川下水行  
之所を也被仰付ハ縁可被成下哉左も無而危右ノ切  
被仰付ハ而若水吐兼速成仕更ハ切至儀而奉相  
止ハ縁仕度由百共奉存ハ以上 十一月

十一月下旬五兵衛ノ赤堀縁ハ君上ハ賞書之内  
境川ノ切ハ也常水計之儀にて満水之節上水拂其  
其堤危示ハ切拂申之由頼人中上ハ由然共加治川と  
申者水上山迄流年ノ所座ハ付常水ノ切ハ而若其  
ノ切之所に止不砂吐上川立埋リ可申ハ左ハ也任水  
直自然絶え洪水之節ハ水拂兼可申之奉存ハ又常水

東橋原表

にこそハ出来兼ハ紫雲寺鴻而新田満水之節ノ切拂  
ハハハ而新田成就可仕共不奉存ハ然者常水ノ切と  
申者こかく満水之節ハ入不申巧と奉存ハ  
ノ切之儀若水野和泉守縁ハ而向事満ハ故今更相止  
申儀不罷成ハ依之常水共少コつコシハ縁にも致  
由々にて事満ハ縁致度由而彼人縁而内該市意被成  
ハ水通川中狭く致更下大夫濱也にハ加治川計海ハ  
水可有申危哉と奉存更

赤堀縁より而上紐成更同書

(前略) 右境川ハ於六間の内於三間西側より持出シ  
中於間者唯今之通常水加治川并紫雲寺鴻而西方ハ水

流々様には仰付申上候様仕度尤も左に無申上候は右  
ノ切之際方水通し川加治川下に堀名加治川之末只  
今迄所質野川、流々場所直に加治川之流海へ切席  
川様には度奉存在在、切席社仰付下候は仕境川  
常川ノ切被仰付候而も昔間奉存候は尤右海へ切席  
川場所信濃守領内にて堵而古田潰し候にても無申  
座候有来荒地堀築候迄に仰付候間右之通被仰付可  
被下哉大堀築候人夫も信濃守領分之人敷を以堀築  
可申候右兩様三内被仰付被下候様は仕度奉存候は尤  
も無申上候而も昔先達而申上候御料於五箇村私領敷  
十箇村洪水之節悉水高可仕と奉存候則待置を以奉

東林堂

窺以上

溝口信濃守宗来

申十二月十二日

赤堀忠左衛門

十二月八日本清五印様仰意には先年迄紫雲寺迄三水加  
治川へ吐申之由兼美定而ハ八郎頼吉にも其譯有之云  
々忠左衛門様被仰上候様は

加治川先年より湯へ吐申上候三十年已前没廻より  
頼申立浮橋口之川塩谷と申所迄三里程三場所堀立  
し申候之浮橋通り先年より水高より輕く罷成候様  
に兼り申候其頃村上御領榎原式部大輔様御代に  
仰付候者古来より加治川之川は浮へ陸中相違  
無申上候



重正月忠左衛門様より御用之由罷出の處而意に中  
勘定所八木清五郎様より一局川下堀割之儀所方より  
も障り無之哉と御尋之付申上矣者初ヶ崎之儀兼而御  
存知之通新堀と相障申其上証文等も御免に比度頼堀  
所は初ヶ崎より三十町北にハハ者新堀と障り有間  
敷事存之然共唯今時分之儀に御免にハハ一故無事  
障り難計御免にハハ凡慮の外に御免に右比度頼三堀  
所より新堀へは川筋ハ程も有御免に比度頼三堀  
も可有御免に然者障り無御免に事存に版申上矣云々  
三月十日江戸廻番の大庄屋五兵衛主庄以御免に  
次方赤堀様へ差上ハハ上書

東本宮製  
京大角製

境川ノ切ハ得者新發田領金谷村ハ同領真野村迄三  
里餘三埋方洪水三ヶ所破損可仕ハ前々ハ洪水三ヶ所堤  
方破損仕ハ享保二年年金石村真野村兩所ハ二埋方  
破ハ新發田御城下ハ水ハ入性還通詰不罷成其市  
而廻國之市上役様新發田ハ三日市通番被為遊其後  
度々埋切仕御城下迄水ハ入申ハ境川ノ切加治川一  
口ハ罷成ハハハ御免に比度頼三堀所方八十七  
園村古田畑凡ハハ百町餘其外御免に比度頼三堀  
村産感仕矣事曆然事存ハ事  
境川ノ切加治川下比度海ハ堀被頼三堀所迄道法三里  
可有御免に事

去巳年加治川堀替り常川下に所歴り故長岡而鎮新  
潟へ兼右川傍者河三障も無而此川由然其松ヶ崎海  
近き所万一川も閉塞れば其節ハ川除任く九川楳  
申二付左様可致者双方申合証文為取替申り此儀を  
以考り得者振元障りハ無之奉存り而事  
新潟にて其節申り若松ヶ崎海へ切落申りハ阿賀  
野川海へ別に蒸りて新潟津障可申哉と申り由此度  
之義者阿賀野川構無而加治川計海へ堀落申儀に  
所存り而事

東林集

新潟後者甲斐信濃越後三國因三山々より出水之由  
敷百三川落名信濃川と申大川申渡り其上管津而鎮

御領分三流所質野川落合申更加治川ハ在大川と連  
い小川にて申渡り一共山川之出りにて其々堤に障  
申り而事

加治川堀抜之所ハ万一海舟出入可任哉と新潟に  
て存り得り可有之哉此所堀落りてハ船ふと入更堀  
所には不奉存り而事

右三通加治川下海へ切落り右此方にし人足も是分  
懸り迷惑至極に而左川傍者菅野河新田に被仰  
仕境川ノ切りて目前条ニ申上り通頼上り又左水堀  
難被仰仕譯に申元更には境川唯今迄之通被成置致  
下度ハ左様にも難被遊りはは境川中控同条明置り

様布新田頼人の被仰任不被下置の而者迷惑至相奉  
存御事

五日江戸屋敷赤坂様より國元遣の由近様へ被仰遣の  
而状一昨日而勘定所罷出の處八本清立即様より被  
仰向は加流川海へ塘落度由百姓共頼之儀致相談の  
處新浮渡水蒸不足いたし漬也申の長岡より達而  
障申の依之場所見旨役人可遣の業等湯落の處よ  
り浮端へ塘切迄新川塘加流川之水蒸可然の云々  
八月御様使塩路兼右衛門様同本長左衛門様會津通御  
下向同十二日直質新田而着庄屋立兵部少野尾迄御様  
様同として被遣十四日より御見分境川ノ切三所初獲

にて次有漢藤坂漢迄段々而是分被遊の十五日頼人小  
八郎而案内申上草荷加流所尾楠村柴橋築地塘切橋際  
より舟にて業等浮之内而見分十七日境川ノ切際上  
り而水盛段々窪地を舐し次第漢村下見通し海波際迄  
而水盛被遊の十九日ノ切四番目定抗より御水盛藤坂  
一本松目迄にて漢浦通塘切迄被遊の事廿一日古川ノ  
切より五百向土辰夫より島見漢次に大夫漢と松ヶ崎  
の間城の躰と申所御見分御様使而意には海へ間敷十  
五所はまこましく此所も水底能可有之更併阿賀ちか  
この故新浮よりまはり可申更兵部申上更は此處工  
柄ヶ崎ニ申所迄計於丁程も有之更御覽の如く阿賀と

三百間程も間而産か故新潟より障有而府間表標に奉  
存ハ此水の市加治川の所質に支へら此所ハつか  
へ上通堤方障迷惑ハ云々御控使標而意ハは加治川  
堤の爲には方上之方にし水殺致ハは爲にも可罷  
成所ニミ里も下にし水殺好之義難心得ハ

閏九月十二日塩詰表右街川橋へ頼書差上松ヶ崎濱河  
渡村の間にし所要水板起仰仕ハは福島浮縁にし即  
新田百町歩自香清開度可是上之旨申上更十一月而後  
任標而歸符

同五月紫雲寺浮近也溝比信濃守御領所被仰付新田場末  
子屋請員証文并一件書頼信濃守方へ而引渡被成開卷也

東林原製

段々出来ハ廣陽廻り初平澤止標而領分村々古荒地右新  
田場之内に有之ハは互別相改戌八月割渡双方証文等  
前相残鴻縁干揚之分米子屋請員ハ

右之通加治川鴻内へ落上ハをノ切ハは川下松ヶ崎に  
満水之市上水原ハ海への分水路而頼申上段々而吟味之  
上分水被仰御料私領數百箇村中故に成ハ事

（明和九年松ヶ崎一件覚書）

享保十四年西江戸表ハ松ヶ崎悪水吐可仰付趣ハ相聞  
ハ處新潟町役人共致出奇障申之ハ去松ヶ崎中砥割  
相成ハ口口加治川洪水之市村方水原相道ハ計に無之  
ハ一福島浮縁多分之新聞場出来表に古村年々水難相

道中御盆に相拘り更切藩福島沼には御料地村方地  
先日有之賜役小新菜田へ上納任小共福島沼一日  
新菜田領と申證跡も無印度小は御料村方地主沼へ  
君出小東縁に二百町歩申公致三印新田破成其外不残  
新菜田領福島沼と申趣御料村々之會徳番面出末致更  
〔境川ノ切一件成年貢書〕

境川悪水吐代りに松ヶ崎被仰召御向又々庄屋五兵衛  
以下三人出府長岡様より被仰上新沼所役人致出府  
罷在双方吟味之跡松ヶ崎印堀割之訣相交實掃摩字楯  
より為取更証文而寄文出此方より文言印加除奉願公  
義而普請役印奥印にて七月廿四日証文為取更証文

東  
林  
蔵  
書

は別帳在之爰不記又而更書は此方より新沼より君上  
小分日文言に更

乍恐書付を以奉申上印事

一今度当國所賀野川而新菜田印領松ヶ崎濱悪水坂川  
形印任小處右堀筋之義先達而私共印願申上印品印記  
小は付定水面印極其上印普請出末形奉願印通大夫に  
被仰付産々難有任若奉在印依而不恐書付奉差上印以  
上

享保十五年戌十一月 越後國蒲原郡新沼渡所代

庄九郎以下九名

同 町年寄

理右衛門以下十三名

曰 旗折

利兵衛 六右衛門

御普請申奉行様

右新川崎分小路出来り處砂地ニ付去成年享保十六出水  
之市川降難係雪代水にて不疎押拂只今にて江所賀野川  
之本川前に罷成りニ付新潟後より頼之品有之由ニ申座  
り為去申普請可社仰付手段無之其上新潟より頼に付去  
夏古河賀野川垣場之田新川社仰付馬共分此川水係池  
右新川無程押垣申り又古河守頼分之内にも右分小川水

去の字一脱字あり  
り不詳

東林堂製

屋座申為女干損所出来用水掛之義吟味に厚吉他領入但  
故内該調系に依之井沃物兵束様迄頼去申吟味被成下り  
崇雲寺陽悪水係堀之儀も不疎砂地にて申付に去子  
者雪代水之節海三岳により殿々潟之方へ堀れ上り是丈  
餘堀水に浮れ不疎干蒸感申所程新田場出来任り其市  
申即定所へ申注進仕に付為申見分井沃様物兵衛様被  
遣申新田望の申の其旨可頼申と進領郡々へ申觸申座に  
上八月中役人場可見分之上申普請目録見古河守役人之  
會右干場へ蒸上り今泉川を加治川へ切流し積丸に後心  
加治川水増か策に付右切流し川下双方堤添築重葺被仰  
付に其上今泉古川へ悪水多く流しに付新田場へ右古川

節を堰通又新田場之東西南北へ悪水堀を通すは海への  
所堀遣に積又今泉古川より北西築地村迄の向山手存在  
より流下は悪水陸堀を引其外新田用水は加流川より新  
井部二箇所古井節二箇所堀廣所も相應に坑樋を伏用  
水を取入腕内川よりも用水を取取積又新田作場道往末  
道に当りり所に相應の橋を懸り積右迄は方中相談相  
極る

新田場望のものは中觸に付段々見合に巻りて付出雲守  
役人度々案内の上地代金河の入札書附九十是道跡惣兵  
衛様へ差出申取處直段高下相改の上望之名も地代金上  
細は勿論種取作物は付開發無滞才宜可仕否身之様子

東林原製

迄委細吟味被仰渡り跡地代金宜身之體成者於七人地主  
に相定夫々申渡り又先頼人平子陸橋兵束儀ハ發端自分  
物入にて普請頼高五ヶ石に付新田場五町無地代にて  
被下り者申渡り

新田場中普請諸色入用直段之儀近御入札被仰付子年九  
月十日申普請雪中は相止まり二月より又取掛夏中迄に不  
残出来はれ右入用中並之儀ハ地代金三年賦上納之内是  
年々去暮より迄若迄の内に取立其外申金虎より可請取  
者被仰付在諸色清拂其外申新田一件之儀出雲守役人請  
込相勤り

新田場之間借量可認出首被仰付ははは出雲守役人より

仕之者其在僧道を以先願人共願之町歩の分録と  
一割渡り

新田百姓唐屋左地無之二付云守領分内真師原是地に  
二百五十町歩餘指上御領所筆地原是地九十町歩餘都  
合計百四十町歩餘無地代にて百姓共へ被下小に付録  
一割渡り

今泉川邊其外用水悪水出堤を作場詰屋左等の灌地云雲  
守中禮所并に本領松平澤正少齋藤柳澤刑部少輔藤領分  
之内敷園所有之代地并に地代金作物種肥代等被下積  
り付是又役人君出帳面は但中勘定所へ長出申り長之  
事

新田場中普請出来浮縁而科和領五十園村余水損相上而  
故相成以上道橋等出来近在遠路共往来自由に成申り老  
時新田惣及列十九百五十町歩程の内千八百町歩程も開  
張仕申り馳引能極有作毛も相應に所産又乍去初作之事  
故枯稿全程相見申り出百姓共も段々小屋掛は此市迄  
百軒余出来り大陽中泥澤の而普請の事故堤道等沈み川  
原高下も出来り以故も而普請可有而危哉と役人共申り  
り

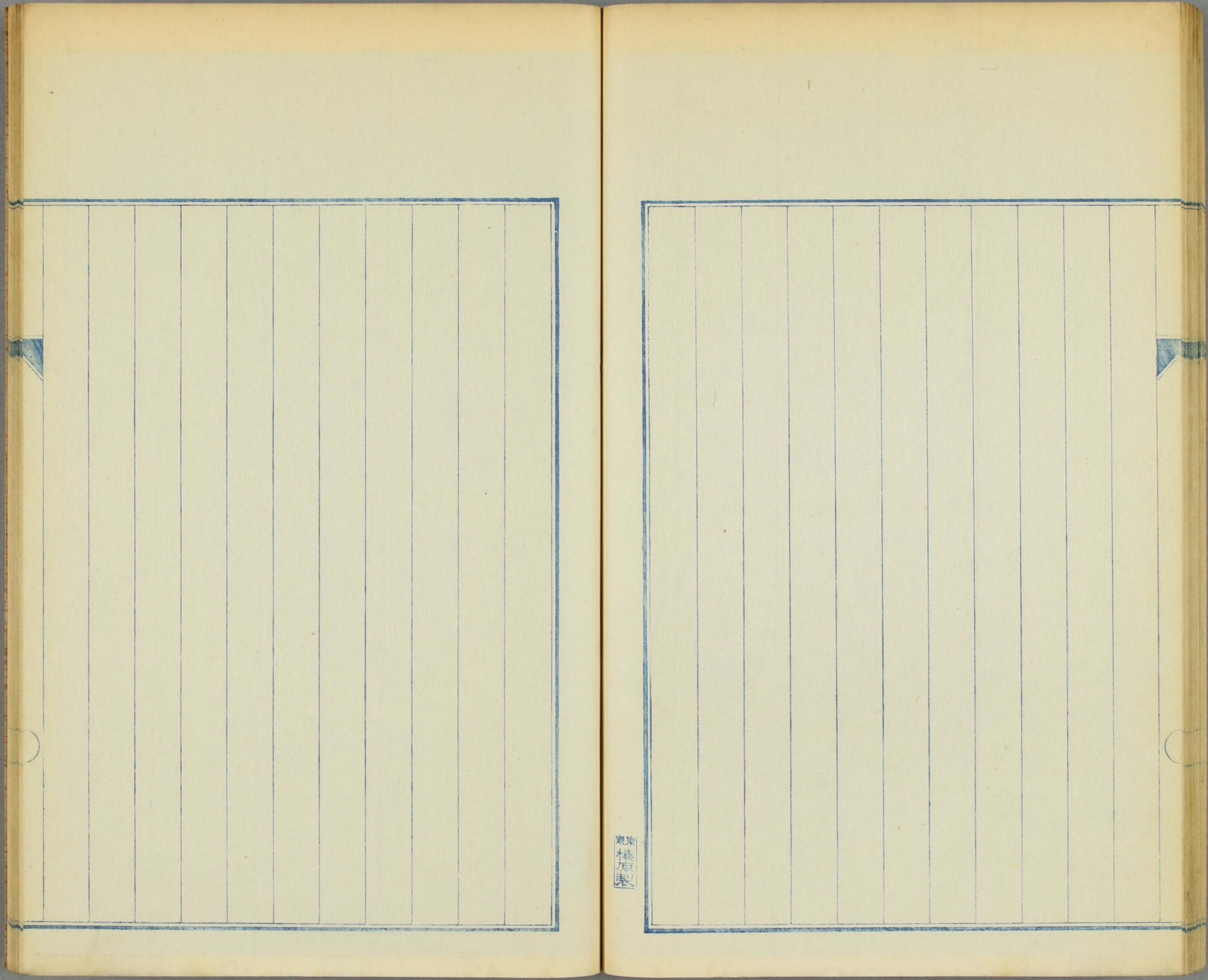
享保十八年丑年九月



右の川五兵衛日記此等考案發一件關係の古簡に考考し  
乙一本を訂す

明治三十四年四月三日

震心



東  
林  
石  
堂

松ヶ崎堀割一件書記

一 御料紫雲寺沼御取廻り五ヶ所有松ヶ崎堀  
水扱ひ是方清波御付是也

一 松ヶ崎堀割一件

一 松ヶ崎堀五ヶ所堀割一件

一 松沼溪水浅此堀廻来船淨土寺有是方清波  
一 寶曆九年通船川堀割御付是也

御料紫雲寺河御新田開闢に付松ヶ崎渡より  
水抜の普請被仰付是也

一加治川之義古来より此の宮寺河より下流の  
より希と大木衣河へ通り自然安享保十三申年御新  
田開人有之加治川の境川水多の切仕を命じ村  
々を迷惑せしめ申訴領主役人より寛橋磨守  
振々垂細之儀より上より安翌四年御普請御役御  
下り八月下旬より十月下旬まで御進る御見立  
遊石切代りの水抜不被仰付てを御成り申  
被具此の宮寺御新田開闢に三十二町御程  
より下流より新田開闢に御新田開闢の第一

ヶ所ノ河口より川下新倉田領神谷内大夫渡松ヶ  
崎の間二十町程のふきヶ石清水基迄に遊りて  
渡山原より常清被仰付難り加治川の河口阿  
賀野川通松ヶ崎渡年々水舟之海色の方漸  
四百間程有之に此所を境川代りの水被被  
仰付是尤新倉田領自常清に仕多被被仰付  
也

一享保十五成年七月新倉田領村方徳代大庄  
屋五兵衛外之江戸表播磨守被仰付松  
ヶ牧の備前守被仰付松ヶ河と為る松渡  
文に仰付則同八月神若清被御役人神下清取

東本願寺

掛廿三日御鉄入同十月十四日御切の川口幅七十  
五間川中幅三十間口より海迄三百八十五町に  
神下清

一享保十六亥年春阿賀野川洪水より松ヶ崎  
渡神若清を御定杭共ニ押流水深二丈餘  
振幅百五十間餘勢の之内に罷成り常清被  
仰付是尤新倉田領自常清に仕多被被仰付  
早連五兵衛江戸、既燈播磨守被仰付神下  
申上五衣破損而御見分とて七月十月  
あは神若清被御下りて候也  
一享保十七年七月衣破損見分を御若清被御役

御下り新嘗田領津島尾村出海之内御堀割堀  
之被仰付七月中旬より因九月下旬迄出来仕  
出

一 右津島尾堀之御普請所流方度毎、砂吐埋水  
行名御座より享保十八丑年御普請御役  
御下り御吟味之上小阿賀守川、堀之杭勿等  
の御目論見被遊翌宣年四月御普請被仰付  
出来仕出

一元文三年二月八日清土郎被御普請御役共々御  
下り小阿賀守川堀之御見分之上四月中旬より御  
取掛八月中旬迄、御普請出来仕出翌年未の

御普請

夏衣御普請の儀被仰付冬中又々破損有之儀  
仕、

一 松ヶ崎悪方被破損之後、古川筋水行悪く松本  
方より寛保元酉年御郡代流川小右衛門被御  
下り御見分翌年戌四月瀨川被再御見分津島  
尾村川原の内其八百二十間川口橋八十間堀留四  
間新親御堀割古川へ水入より被御普請被仰付  
七月中旬出来仕出然處新川狩又埋居付  
延享元年子丑月下旬より御修葺六月下旬迄  
出来仕出  
一通船川之儀、一通船不足支被、不絶渡方仕

水得共松ヶ崎水戸水勢治り引落敷に付寶  
曆七丑年御普清御役御下り書領本村を松海  
村地内、通船川堰碇の傍に御見分被置り  
宣年御代官窪田十左衛門様御下り右の傍に  
御普清被仰付也

一安永二巳年三月御普清御役御下り通船川の  
右と砂川取不徳普清お加え得共難保手及  
西より廿以前の古通船川の御普清同七月出来  
仕也

東林院藏

時と通船差支つて今年、領分過分之念  
入用差出川渡仕在也

松ヶ崎掘割一件

一享保十三申年

一境外又切禁言寺湯新入抄新又切申是年

一松平原と進抄り領地と

一新考及田領五十三ヶ村中料十五ヶ村は境外又切

上仰付達或るは新考を自江言表江大庄屋五

兵衛名主孫惣次在治中在治地既後人方

掃魔守、安和、上丸

一享保十四酉年

一丸中見分、中若治後塩沼善右衛門抄目本

善右衛門抄目本(下取)



一享保十五戌年

一太左原五兵衛兵左の乱に表長左の江庄致成

為事

一松ヶ崎迄の吐堀割は若き時御仰付の若き時  
後言指儀左の堀中下役者利兵衛掃部守時  
清和殿の御八月十二日に出東政免

太左原兵衛入由

一享保十五戌年

一人是堀割に御常水深九尺に

外中料十五ヶ村日七人足出に

一堀割長三百八十五尺

一堀中三物百堀口水清に交見七十五尺に

一在堀割に御常水深九尺に

一享保十六亥年

一雪代出水に在り若き時御被損存江庄表三由  
右幸太左原五兵衛兵左の御常水深九尺に  
為守右幸堀有石三ヶ堀中上三ヶ言指儀左由  
門抄當利兵衛堀に在り

一(畧)

一享保十七子年

一六月被損箇而為湯見分り若き時御被損大河内長  
兵衛守時清和殿津島尾河原の堀割乱成

水列菩提仰信事

一 塘割新田帳

石入勇

一 享保十九年四月廿四日

一人是三万八千人

但中料石十五ヶ村の石出

一 杭木の中木被下

一 (四)

一 享保十八年

一 中善治後百餘万石の杭木を幸内被所  
石分上小阿多河川に被下

一 享保十九年

小阿多河川堰造り書傳入勇

一 享保十九年

一人是七万九千人

一 元文三年

一 中善治後百餘万石の杭木を幸内被所  
九ヶ浸中見分十ヶ松ヶ崎中見分新田海十ヶ  
陸田了万石寺の海十ヶ所中見分万石  
寺村中見分十三ヶ小阿多河川通新田海十  
五ヶ所中見分陸田了米子新田中海(五畝)  
中善治後八木海十ヶ物新田中見分(五畝)

一 四月八日萬壽寺村に中着子河合河堰込り番  
 清波仰付り中着清中万壽寺村に止居左番  
中着清中万壽寺村に止居左番  
 一 堰止中着清中万壽寺村に止居左番  
 一 中着清中万壽寺村に止居左番  
 一 小川河合河堰込り番  
長南方三万四千六百  
中 三万七千八百  
 一 田知方波降扱るに十八百  
 一 下里河原寺番に扱則長八十百 (相取)  
 一 田知方波降扱るに十八百 (相取)  
 此入勇

小川河合河堰込り番  
 文五年清波仰付り番  
 井上着左番  
 人足七千八百

一 文字番子八百番  
 一 人足扱三万人番  
内 廿千八百人 小川河合河堰込り番  
 十二万七千人番 小川河合河堰込り番  
 一 元文四年  
 一 小川河合河堰込り番 (下取)  
 一 元文五年  
 一 小川河合河堰込り番 (下取)  
 一 寛保元年  
 一 松ヶ崎并り分 (下取)  
 一 五万八千 松ヶ崎并り分  
 此川中

内

三百四十七石  
百二十四石  
但亦原比尺石是又四八石

水南  
所川子

一寛保二戊年

一津島河原堀割り考法之申四月官告御

檢定次第松ヶ崎分署 (下取)

一四月十常鉄好七月十九日仕廻廿日行出立 (取下)

一堀割 長八石五斗

一同川中 川尺八十石  
堀尺四十石

一常取石三尺二寸三尺六寸迄之堀入

(中略)

一石目取一考之概出之長五十五石七斗也

東  
林  
堂  
製

一同名比書出之長三石七斗也

在入舟

一文在子三石五斗

一人足取石万六石八斗

一延享元子年

(畧)

一戊年の堀割ハ石千石之内新川中吐堀長

四石八十石川口八十石川下四石五斗三尺六寸也

平均也

(中略) (逆光概出之概取波除お新河等

平均也)



右入月

一金沙子尚純確と表知す  
一人足取入万人余

一四年冬中色

一在津雪清治あり節被拂供度り書清あり

(下略)

一岡十二年

一在石河川内長き七八千石横る  
六十石余之石洲並出江村川前畑縁に  
僅し水入有之り通船是為り是後之は

町役人工能治之上在石河川内長き七八千石  
水之極利雪清治あり節被拂供度り書清あり

(中略)

右入月

一人足 三万六千三人

(下略)

右一冊文政九戌年四月書之三子書也

(右新書の藩表御用部屋文書)



因古高野村道旁村地内所及河原領と云ふ事也  
毎加河川水境川右河原大平原及入河原川料  
村三年と云ふ事不本通也右河原水海江橋  
首善治所領料村と云ふ事河原領村方  
及赤松河原原領古集在来の境助  
双方互合以十七日境原無事と云ふ事  
右高野領之令善治所領料村及河原領料  
寺河原領入事と云ふ事河原領料村及河  
助と云ふ事と云ふ事

寛文十三年

一境川又切ら仰付

長三石間

敷八百

方八尺

又切事左記平均と云ふ事

河原田圍邊境仰付

右境川と云ふ事加河川分取之松平原正の御持領  
上河原河原領料村及河原領料村と云ふ事  
郡川中島村米子屋小作と云ふ事  
河原田圍邊境仰付河原領料村及河原領料村  
入事と云ふ事河原領料村及河原領料村  
申之(中味)右加河川出所の高野堤通不本通水  
下河原領料五丁半中三ヶ村及河原領料村及河  
原領料村及河原領料村





享保十五戌年七月

一松ヶ崎迄舟吐し仰付新船役人と江尾表之為  
取交済文に仰付

(中略)

為取交し済文之事

一此寺官寺内中意田開費に付(中略)新島田所領  
松ヶ崎渡りも(中略)舟板取付り(中略)仰付由(中略)  
寺内儀に不申満存(中略)江尾針吐為川  
船中意寺内大夫に仰付何處川船多上江御一航  
大航も此に仰付(下略)

享保十五戌年七月廿四日

新島田御新島田組

大倉屋 五兵衛

日五十五日

大倉屋 舟左之門

日川口御新島田組

舟左之門

新島田御新島田組

舟左之門

(中略)

十川五立衛四比云  
松ヶ崎喜保十五  
年八月亦云御  
治録入口十月十四  
日御打吃

寛保十五年戌年八月

一 松ヶ崎正丸仕川飛の喜保傳の御打吃

右の御打吃の御打吃

口 喜保傳 高橋儀左の門持

口 喜保傳 高橋儀左の門持

寺嶋清兵衛持

長三郎出役大門市左の持

長三郎出役嶋村市左の持

右八月の御初十二月の喜保傳中東の持

右の喜保傳中東の持

一 振割 長三郎八十五百

東橋屋製

振 三十百

右中東御初の御初

御初 水持の御初 七十百

振割 右中東御初の御初

振割 右中東御初の御初

右中東御初の御初

北入の御初

一 喜保傳 七十百

一人の御初の御初

外の御初の御初

北入の御初

享保十六亥年事

三石の吐破損

(申取)

右の三石の吐破

り破損幅五丁百餘破損

(申取)

安永二己申 文政七申年迄五十二己

一石の吐破は昔損出共

右の昔損出共

延長五丁百五丁 〇石の吐破

内

八丁百五丁 川口二ノメ

〇石の吐破 二ノメ

〇石の吐破 〇石の吐破

五丁百五丁 〇石の吐破

〇石の吐破 〇石の吐破

〇石の吐破 〇石の吐破







是ハ新島田欽王之後船仕立也故不爲支拂といハ  
新島田欽王也(中略)船仕立也(中略)船仕立也(中略)  
新島田欽王也(中略)船仕立也(中略)船仕立也(中略)  
新島田欽王也(中略)船仕立也(中略)船仕立也(中略)  
新島田欽王也(中略)船仕立也(中略)船仕立也(中略)  
新島田欽王也(中略)船仕立也(中略)船仕立也(中略)  
新島田欽王也(中略)船仕立也(中略)船仕立也(中略)  
新島田欽王也(中略)船仕立也(中略)船仕立也(中略)  
新島田欽王也(中略)船仕立也(中略)船仕立也(中略)  
新島田欽王也(中略)船仕立也(中略)船仕立也(中略)

寶曆九年十月

新島田欽王

新島田欽王





